

論文

# 初期仏典に見られる「原因」を表す語について

——「生起」に関する語をめぐって——

唐 井 隆 徳

〔抄 録〕

初期仏典中には、基本的に「原因」を意味しないにもかかわらず、「原因」という語義を担っている語がいくつか存在する。そこで、本稿ではパーリ伝承の初期仏典を中心に、「生起」を意味する語の調査を行い、それが「原因」の意味で使われているのかを確認する。また、基本的に「原因」を意味する語の用例も概観し、「生起」を意味する語との比較もおこなう。そこから、本稿で扱う「生起」を意味する語が「原因」の意味で用いられるのは、後代の文献においてであり、初期仏典の範疇で「原因」として明確に用いられるのは、一部の語のみであることを指摘する。以上のことから、初期仏典における「原因」関連語を訳す際には、それらすべてを「原因」として扱うのではなく、それぞれの語や文脈に応じて理解していく必要があると言える。

キーワード sambhava, samuṭṭhāna, samuppāda, pabhava, jātika

## 1. はじめに\*

仏教の主要教理である縁起 (paṭiccasamuppāda) は「縁って生起すること」という意味であり、因果関係を表している。そのため、仏教文献を渉獵すれば、「原因」を表すと考えられる様々な語を見出すことができる。このことは初期仏典に目を向けても同様であり、従来それらは同義語として扱われることもあった<sup>(1)</sup>。例えば、本稿でも扱う縁起の定型句「何を因とし (kiṃnidāna)、何から出現し (kiṃsamudaya)、何に由来し (kiṃjātika)、何から発生するのか (kiṃpabhava)」には、疑問詞と名詞の複合語が四種類併記されている。ここではこのように訳しているが、この複合語の疑問詞と名詞をすべて同格関係と見做し、四つの複合語を「何を原因とするのか」と画一的に理解している訳も見受けられる。しかし、それらの名詞の中には、基本的に「原因」を意味しないにもかかわらず、「原因」という語義を担っている語も存在する。その例証として、かつて筆者は samudaya を取り扱い、samudaya は基本的に「生起」を意味する語であるが、その用法などから「原因」という意味で使われる場合があることを確認

した<sup>(2)</sup>。また、一般的に「原因」を意味するとされる *nidāna* についても考察し、*ni-√dā* が「結びつける」<sup>(3)</sup>を基本的意味としている<sup>(4)</sup>ことから、*nidāna* をすべて「原因」という限定的な意味で訳すことに伴う問題点<sup>(5)</sup>を指摘した<sup>(6)</sup>。既に拙稿では、*samudaya* に関する用例として「生まれの出現により、老いと死の出現がある（*jāṭisamudayā jarāmaṇasamudayo*）」<sup>(7)</sup>を挙げている。ここに見られる *samudaya* は「原因」ではなく「生起」を意味するが、文章自体は因果関係を示していることが窺える。以上のことから、因果関係を説く際に使用される語が、「原因」を意味する語としても定着していることが想定され得る。そのため、このような語を包括的に調査し、同義語とも見做されてきた個々の語が、初期仏典の範疇で「原因」として用いられているのかを確認しておく必要がある。

そこで本稿では、パーリ伝承の初期仏典を中心に、「生起」を基本的意味とする語をいくつか取り上げて考察する。「生起」を意味する語を取り扱う理由は、*samudaya*（出現）のように因果関係を説く際に用いられる事例が多く、上記の想定を検証するに相応しいと言えるからである。また、*hetu* のように一般的に「原因」を意味する語の用法も確認し、「生起」を意味する *samudaya* との差異を示すことで、「生起」を意味する語が「原因」という語義を担う背景についても若干の考察を試みる。なお、本来であれば各語に対する本格的な研究が必要と思われるが、本稿は「生起」を意味する語の考察を目的としているため、関連語をまとめて扱うことにする。

## 2. 「生起」を意味する語の用例

ここでは、「生起」を意味する語の用例を概観し、それぞれの語が「原因」という語義を担っているのかを確認する。

### 2.1. *samudaya*

先に述べたとおり、*samudaya* については既に考察したが、本稿の主題が「生起」であることからここでも扱う。ただし、詳細については拙稿に譲り、以下にその内容を概括する。

*samudaya* は苦集諦に見られる語であるため、「原因」と理解されることも屢々あった。しかし、苦集諦の導入部分に *idam kho pana bhikkhave dukkhasamudayaṃ ariyasaccaṃ, yāyaṃ taṇhā ...*<sup>(8)</sup>とあるのに対し、*samudaya* が男性名詞であるにもかかわらず中性変化していることから、「原因」と訳すことに対する問題が提起されてきた。そこで、*samudaya* の用例を調査したところ、「生起」を意味する事例が主な用法であることが分かった。一例を挙げると、SN 12. 28 (Vol. II, pp. 43-45) には、「老いと死を理解する。老いと死の出現（*jarāmaṇasamudaya*）を理解する。老いと死の抑止を理解する。老いと死の抑止に至る実践道を理解する」とある。そこでは、縁起支を四聖諦の体系に当てはめて、四つの事項を解説していることから、苦集諦の意味を知る上でも重要な用例となる。それらのうち、老いと死の出現は、先に見たよ

うに *jāṭisamudayā jarāmaṇasamudayo* (生まれの出現により、老いと死の出現がある) と説明される。この場合の *samudaya* を「原因」と解する余地はなく、明らかに「生起」を意味していることから、苦集諦の *samudaya* も「生起」を意味していた可能性が高い。管見の限り、*samudaya* が明確に「原因」を意味する事例は、DN 15の九支縁起説の説明に見られるもののみである。例えば、「生まれを縁とすることにより、老いと死が〔生じる〕」を解説する箇所には「…まさにこれが老いと死の原因 (*hetu*) であり、これが因 (*nidāna*) であり、これが出現因 (*samudaya*) であり、これが縁 (*paccaya*) である。すなわち生まれである」<sup>(9)</sup>とある。以上のことから、*samudaya* は基本的に「生起」を意味するが、初期仏典の範疇で「原因」という語義も担っていることが看取される。

## 2.2. *sambhava*

次に、*saṃ-√bhū* からなる *sambhava* について考察する。*saṃ-√bhū* の派生語の用法は、「生まれを縁とすることにより、老いと死、憂い・嘆き・苦しみ・落胆・苛立ちが生成する (*sambhavanti*)」<sup>(10)</sup> という縁起説に見られるものや、「誤った見解を縁とすることにより、多くの悪しき善くない諸現象が生成する (*sambhavanti*) …」<sup>(11)</sup>、「原因に縁って生成した (*hetuṃ paṭicca sambhūtaṃ*)」<sup>(12)</sup>、「無常なるものから生成した (*aniccasambhūta*) 形態が、どうして常住なるものとなるだろうか」<sup>(13)</sup>、「縁を除いて、識別作用の生成 (*sambhava*) は存在しない」<sup>(14)</sup>、「諸々の憂いの生成がある (*yato sokāna sambhavo*)」<sup>(15)</sup> などのように教理的なものから、「これらの大きな川が生成する (*yato imā mahānadiyo sambhavanti*) …」<sup>(16)</sup>、「私は、母胎から生じ母から生成する (*mattisambhava*) 者を、婆羅門と言うのではない」<sup>(17)</sup>、「卵から生成する (*aṇḍa-sambhava*)」<sup>(18)</sup> などのように一般的なもので多岐にわたる。そして、多くの場合、因果関係を説く文脈で用いられている。

次に扱う *Dvayaṭānupassanāsutta* (Sn (pp. 139-149)) には、覚りに導くための二種の観察方法として、苦の出現と抑止を観察することが述べられている。そのうち、苦とその原因について説く際に *sambhava* を用いており、苦の原因となる種々の語が挙げられている。はじめに、識別作用 (*viññāṇa*) の事例を以下に示す。

### Sn 734

yaṃ kiñci dukkhaṃ sambhoti, sabbam viññāṇapaccayā  
viññāṇassa nirodhena n' atthi dukkhassa sambhavo.

生成する (*sambhoti*) 苦は何であれ、すべては識別作用を縁とすることにより〔生成する〕。

識別作用の抑止によって、苦の生成 (*sambhava*) は存在しない。

この場合、*sambhava* は「生起」を意味しており、「原因」を意味しない。しかし、同じ *Dvayatānupassanāsutta* における次の事例の *sambhava* は、「生起」だけでなく「原因」を意味する可能性もある。

Sn 741

etam ādīnavam ñātvā taṇhā dukkhassa sambhavam  
vītataṇho anādāno sato bhikkhu paribbaje.

渴望による苦の生成というこの災いを知って、

渴望を離れた状態で、取り込もうとせず、乞食修行者は自覚した状態で遍歴すべきである。

下線部の *taṇhā* は *taṇhāya* の縮約形と理解した<sup>(19)</sup>が、*taṇhā-dukkhassa* のように複合語と理解することも可能である<sup>(20)</sup>。ただし、いずれにしても文意は変わらない。ところで、この韻文には、*taṇham* という異読 (Be) も存在し、その場合「渴望」が「苦の *sambhava*」ということになるため、*sambhava* が「原因」を意味する可能性もある<sup>(21)</sup>。上記の韻文にはパラレル<sup>(22)</sup>も多く、それぞれ *taṇhā*, *taṇham* の読みが存在することから、いずれが元の読みかを確定させることは困難である。本稿では、上の韻文が説かれる前に散文で「生成する (*sambhoti*) 苦は何であれ、すべては渴望を縁とすることにより〔生成する〕…一方、渴望が残りなく褪せて抑止されることにより、苦の生成 (*sambhava*) は存在しない」とあること、さらに *sambhava* が基本的に「生起」を意味することから、*taṇhā* の読みをとって「生成」と訳した。因みに、対応する Uv 3. 18には *etad ādīnavam jñātvā tṛṣṇā duḥkhasya sambhavam* とある。また、『出曜経』(T04. 636b)、『法集要頌経』(T04. 778c) の対応箇所には「能覺知是者 愛苦共生有」とあり、「原因」を意味する語は確認されない。

筆者が調査した限り、初期仏典中に *sambhava* が「原因」を意味する明確な用例は見出せなかった。しかし、後代の文献になると *sambhava* が「原因」を意味すると考えられる事例も確認できる。Sn *Kalahavivādasutta* を註釈する *Mahāniddesa* には、以下のようにある。

Nidd I (p. 256. 1-9)

kuto pahūtā kalahā vivādā ti. kalahā ca vivādā ca kuto pahūtā, kuto jātā, kuto sañjātā, kuto nibbattā, kuto abhinibbattā, kuto pātubhūtā, kiṃnidānā kiṃsamudayā kiṃjātikā kiṃpabhavā ti kalahassa ca vivādassa ca mūlaṃ pucchati, hetuṃ pucchati, nidānaṃ pucchati, sambhavaṃ pucchati, pabhavaṃ pucchati, samuṭṭhānaṃ pucchati, āhāraṃ pucchati, ārammaṇaṃ pucchati, paccayaṃ pucchati, samudayaṃ pucchati papucchati yācati ajjhesati pasādeti ti, kuto pahūtā kalahā vivādā.

「諸々の争いと諸々の論争はどこから発生したのか」とは、「諸々の争いと諸々の論争は、

どこから発生し、どこから生じ、どこから産出し、どこから生起し、どこから発起し、どこから顕現し、何を因とし、何から出現し、何に由来し、何から発生するのか」と〔考えて〕、争いと論争の根本 (mūla) を尋ね、原因 (hetu) を尋ね、因 (nidāna) を尋ね、生成因 (sambhava) を尋ね、発生因 (pabhava) を尋ね、現出因 (samuṭṭhāna) を尋ね、糧 (āhāra) を尋ね、拠りどころを (ārammaṇa) 尋ね、縁 (paccaya) を尋ね、出現因 (samudaya) を尋ね、問い、請い、求め、澄み渡らせる、ということで「諸々の争いと諸々の論争はどこから発生したのか」である。

ここに列挙されている「尋ねる (pucchati)」の目的語は「原因」の類義語<sup>(23)</sup>と考えることができ<sup>(24)</sup>、先の samudaya と共に sambhava も併記される。また、後に考察する samuṭṭhāna や pabhava も確認される。以上の語を「生起」と解せなくもないが、文脈上「根本」に近い意味で理解する方が自然である。また、*Cullaniddesa* (Nidd II (pp. 231-232)) では、「根本を見る者 (mūla-dassāvin)」を解説する中で、上の根本 (mūla) をはじめとする「原因」の類義語が列挙されている。そこでは、三不善根、三善根、無知を根本とするもの (avijjā-mūlaka)、怠慢でないことを根本とするもの (appamāda-mūlaka)、十二支縁起説における縁起支間の関係 (例：無知は諸々の形成作用の根本である)、六つの感覚器官とそれぞれにある患いとの関係 (例：眼は眼にある諸々の患いの根本である) を扱っている<sup>(25)</sup>。

さらに、*Visuddhimagga* における二十四縁の解説のうち、hetu-paccaya を説明する箇所には、「『縁 (paccaya)、原因 (hetu)、根拠 (kāraṇa)、因 (nidāna)、生成因 (sambhava)、発生因 (pabhava)』というものなどは、意味という点で一つであり、文字という点で異なっている」<sup>(26)</sup>とあり、sambhava は「原因」の類義語として扱われている。

### 2.3. samuṭṭhāna

sam-ud-√sthā からなる samuṭṭhāna も「生起」を意味する語である。sam-ud-√sthā の派生語の用法として、「諸々の憶測はどこから現出し (kuto samuṭṭhāya)」<sup>(27)</sup>、「渴望の弓から現出し (-samuṭṭhāna) …」<sup>(28)</sup>、「自己から現出し (-samuṭṭhāna) …」<sup>(29)</sup>、「鉄から現出した (samuṭṭhita) 汚れ」<sup>(30)</sup>などが確認される。次に示す資料は samuṭṭhāna が明確に「生起」を意味する用例である。

MN 78 (Vol. II, p. 26. 12-16)

ime ca, thapati, akusalasīlā kiṃsamuṭṭhānā? samuṭṭhānam pi nesam vuttaṃ. cittasamuṭṭhānā ti 'ssa vacanīyam. katamaṃ cittaṃ? cittaṃ pi hi bahu anekavidhaṃ nānappakāraṇaṃ yaṃ cittaṃ<sup>(31)</sup> sarāgaṃ sadosaṃ samohaṃ, itosamuṭṭhānā akusalasīlā.

また、棟梁よ、これらの善くない生活習慣は何から現出するのか。それらの現出も言われ

ている。「〔それらは〕心から現出する」と言われることになるだろう。心とは何か。実に心も、多く、多種であり、異なる種類のものである。心が、熱望を伴い、嫌悪を伴い、迷妄を伴えば、諸々の善くない生活習慣はここから現出する。

下線部を見れば、ito-とあることから、複合語の後分に位置する *samuṭṭhāna* は「原因」ではなく「生起」を意味することが分かる。また、上の引用文に相当する漢訳（MĀc 179（T01. 721a））も確認しておく、「物主。此不善戒從何而生。我說彼所從生。當知從心生。云何爲心。若心有欲有恚有癡。當知不善戒從是心生」とある。原文に *samuṭṭhāna* に対応する語があったかは不明だが、少なくとも「原因」という語を想定していないということ、「～から生じる」のように副詞の接尾辞-tas を想定し得る訳であるといえる。

次に示す用例は、ある沙門や婆羅門たちが「この人が感受する楽、あるいは苦、あるいは苦でもなく楽でもないものは何であれ、そのすべては以前になされたことを原因（-hetu）とする」と主張することに対して意見を求められた時の世尊の返答である。

SN 36. 21（Vol. IV, p. 230. 15-26）

*pittasamuṭṭhānāni pi kho Sīvaka idhekaccāni vedayitāni uppajjanti. sāmam pi kho etaṃ Sīvaka veditabbam yathā pittasamuṭṭhānāni pi idhekaccāni vedayitāni uppajjanti. lokassa pi kho etaṃ Sīvaka saccasammataṃ yathā pittasamuṭṭhānāni<sup>(32)</sup> pi idhekaccāni vedayitāni uppajjanti. tatra Sīvaka ye te samaṇabrāhmaṇā evaṃvādino evaṃdiṭṭhino yaṃ kiñcāyam purisapuggalo paṭisaṃvedeti sukhaṃ vā dukkhaṃ vā adukkhamasukhaṃ vā sabbaṃ taṃ<sup>(33)</sup> pubbekatahetūti yaṃ ca sāmam ñātaṃ taṃ ca atidhāvanti yaṃ ca loke saccasammataṃ taṃ ca atidhāvanti. tasmā tesam samaṇabrāhmaṇānaṃ micchāti vadāmi.*

シーヴァカよ、確かに、この世で感受された一部のものは胆汁から現出するものとしても生起する。シーヴァカよ、この世で感受された一部のものは胆汁から現出するものとしても生起するように、確かに、自らによってもこのことが知られるべきである。シーヴァカよ、この世で感受された一部のものは胆汁から現出するものとしても生起するように、確かに、世間にとってもこのことが現実として認められている。そこで、シーヴァカよ、「この人が感受する楽、あるいは苦、あるいは苦でもなく楽でもないものは何であれ、そのすべては以前になされたことを原因とする」と、このような主張を持ち、このような見解を持つ、いかなる沙門や婆羅門たちも、自らによって知られたことを通り越し、そして、世間で現実として認められていることを通り越している。それゆえ、その沙門や婆羅門たちの〔主張は〕誤っていると、私は主張する。

ここでは、宿作因説を唱える者に対する批判として、この世で受ける感受が以前になした業

によるものだけではないことを示しており、下線部の *pittasamuṭṭhāna* を含め、八つの要因（「業の果報から生じるもの（*kammavipākaja*）」も含む）を想定している<sup>(34)</sup>。問題となるのは *pittasamuṭṭhāna* という複合語の理解である。註釈（Spk (Vol. III, p. 81)）は、この複合語を *pittapaccaya*（胆汁を縁とする）と解釈しており、*samuṭṭhāna* を「原因」と理解しているようにも見える。しかし、八つの要因すべてに「原因」の語は見られず、先の用例で *samuṭṭhāna* を後分とする複合語を「～から現出する」と理解したこと、さらには明確に「原因」を意味する *samuṭṭhāna* の用例が確認されないことから、この場合の *samuṭṭhāna* も「生起」を意味する可能性が高い。また、対応する漢訳（SĀc 977 (T02. 252c)）には「或從風起苦。衆生覺知。或從痰起。或從涎唾起…」とあり、先の漢訳と同じように「原因」ではなく「生起」の意味で訳されている。

このように、*samuṭṭhāna* も基本的に「生起」と理解する方がよいと思われるが、先述した *Niddesa* に見られる「原因」の類義語の中には *samuṭṭhāna* も確認される<sup>(35)</sup>。

#### 2.4. *samuppāda*

次に、縁起（*paṭiccasamuppāda*）の語に見られる *samuppāda* を扱う。*sam-ud-√pad* の派生語も「生起」を意味する。例えば、「原因によって生起した（*hetusamuppanna*）」<sup>(36)</sup>、「縁って生起した（*paṭiccasamuppanna*）」<sup>(37)</sup>、「苦の生起（*dukkhasamuppāda*）」<sup>(38)</sup>、「…このように生起した（*samuppanna*）諸々の享受物には…」<sup>(39)</sup>などがある。また、接頭辞 *sam-*が付されない用例も多く、「眼と色・形に縁って（*paṭicca*）、眼による識別作用が生起する（*uppajjati*）」<sup>(40)</sup>、「これの生起（*uppāda*）により、これが生起する（*uppajjati*）」<sup>(41)</sup>、「生起した（*uppanna*）他の主張を…」<sup>(42)</sup>などが確認される。さらに、SN 5. 9 (Vol. I, p. 134) では、「どこに、肉体が生起した（*samuppanna*）のか」という問いに対し、「原因に縁って生成した（*sambhūta*）」と返答していることから、*sam-ud-√pad* と *sam-√bhū* を同義として扱っていることが窺える<sup>(43)</sup>。

また、縁起（*paṭiccasamuppāda*）を説明する SN 12. 20 (Vol. II, p. 25) を見ても、「原因」ではなく「A を縁とすることにより B が〔生じる〕」という因果関係を縁起と呼んでいることが分かる。その一方で、*Visuddhimagga* には、「縁起とは、縁である諸現象と知られるべきである（*paṭiccasamuppādo ti paccaya-dhammā veditabbā*）」<sup>(44)</sup>とある。ここでは、縁起を因果関係と見るのではなく、「原因」と見ていることが窺え<sup>(45)</sup>、「生起」を意味する語が「原因」の意味で理解されていると言える<sup>(46)</sup>。さらに、そのことがより明確に表れているのは、縁起（*pratītyasamutpāda*）と縁已生（*pratītyasamutpanna*）を説明する『俱舍論』の記述である。そこには、「ここでは、生起（*samutpāda*）が原因（*hetu*）であり、生起したもの（*samutpanna*）が結果（*phala*）であると考えられている」<sup>(47)</sup>とあり、「生起」を意味する *samutpāda* を「原因」と解釈する説があることも知られている。

## 2.5. pabhava

pra-√bhū の派生語も「生起」を意味し、因果関係を説く文脈で用いられる。例えば、「どこから発生した（pahūta）のか」<sup>(48)</sup>、「愛着に従い、この苦が発生する（pahoti）」<sup>(49)</sup>、「…正しい見解を持つ者には、正しい構想が発生する（pahoti）」<sup>(50)</sup>、「このガンジス川が発生し（yato ... pahoti）」<sup>(51)</sup>などがある。

一方、名詞の pabhava は、初期仏典中に「原因」を意味する事例が確認される。Sn *Mettagūmāṇavapucchā* では、婆羅門の学生メッタグーが「世間には多くの形態をもつ苦があるが、これらはいったいどこから（kuto）起こった（samudāgata）のでしょうか」と尋ねた後、世尊が次のように返答する。

Sn 1050

dukkhassa ve maṃ pabhavaṃ apucchasi, Mettagū ti Bhagavā taṃ te pavakkhāmi yathā pajānaṃ:

upadhīnidānā pabhavanti dukkhā, ye keci lokasmiṃ anekarūpā.

世尊は「言った」。メッタグーよ、あなたはまさに苦の発生因（pabhava）を私に尋ねた。

私は理解しているとおりにそれをあなたに説くことにします。

世間において多くの形態をもつ諸々の苦は何であれ、〔それらは〕自分のものとする  
こと<sup>(52)</sup>との結びつきがあって発生する（pabhavanti）。

「どこから（kuto）」と尋ねていることから、ここでの pabhava は「原因」を意味すると考えられる。そして、pabhavanti という動詞形も見られ、「生起」を意味する語の派生語が「原因」を意味していることが看取される。また、次の用例では、スメーダーが過去世（コーナーガマナ世尊の時）において精舎を布施し、その結果として神や人としてくり返し再生したことが説かれている。そして、おそらくその布施のことを指していると考えられるが<sup>(53)</sup>、「それが原因（hetu）である。それが発生因（pabhava）である。それが根本（mūla）である」<sup>(54)</sup>という文章が続く。ここに併記されている語から考えれば、この場合の pabhava も「原因」相当の意味を持つと考えられる。その一方で、「無知という根本から発生し（aññānamūlappabhava）」<sup>(55)</sup>や、縁起法頌として知られる「諸現象は原因から発生するもの（hetuppabhava）」であり、それらの原因を如来は言った…<sup>(56)</sup>のように、複合語の後分にくる pabhava は、辞書<sup>(57)</sup>にあるとおり「生起」を意味する。そのため、縁起の定型句<sup>(58)</sup>である「老いと死は、何を因とし、何から出現し、何に由来し、何から発生するのか（jarāmarañam ... kiṃnidānaṃ kiṃsamudayaṃ kiṃjātikam kiṃpabhavaṃ ...）」<sup>(59)</sup>に見られる kiṃpabhava の pabhava も「生起」と理解する方がよい。ただし、先に見たように「原因」を意味する pabhava の用例がある以上、「何を発生因とするのか」と理解して、疑問詞と pabhava を同格の関係と見做すことも可能である。

## 2.6. jātika

さて、先に挙げた縁起の定型句には *kiṃjātika* という語も確認できる。はじめにも述べたように、この定型句の複合語をすべて同格の関係と見て、*jātika* を「原因」と理解する向きもある<sup>(60)</sup>。しかし、辞書による限り *jātika* は、複合語の後分に位置する場合「～の生まれの」「～の種類の」「～の性質の」「～から生まれる」などを意味し<sup>(61)</sup>、*jātika* 自体が「原因」を意味することはない。*jātika* の語源である *√jan* の派生語は、これまでの用例と同様「生起」を意味し、因果関係を説く文脈で頻繁に確認される。例えば、「親交から恐れが生じた (*jāta*)。家から塵が生じる (*jāyate*)」<sup>(62)</sup>、「楽しまないこと、楽しむこと、身の毛のよだちはどこから生じるのか (*kutoja*)」<sup>(63)</sup>、「実に木片から火が生じる (*jāyati*)」<sup>(64)</sup>、「愛しいものから憂いが生じる (*jāyati*)」<sup>(65)</sup>、「原因から生じており (*hetujāta*)」<sup>(66)</sup>、「…が存在する時、意欲が生じる (*jāyati*)」<sup>(67)</sup>などがある。また、先に *pabhava* の用例として挙げた Sn 1050に続く Sn 1051には、「苦が生じる発生因 (*jāti-pabhava*) を見る者は…」とあり、基本的に誕生などを意味する名詞の *jāti* が「生起」の意味で、「原因」を意味する *pabhava* と共に用いられている。

その一方で、先の定型句に対する註釈 (Ps (Vol. II, p. 18), Spk (Vol. II, p. 27)) は、疑問詞に続く四つの語 (*nidāna*, *samudaya*, *jātika*, *pabhava*) を「原因」の類義語 (*kāraṇa-vevacana*) と見做しており、「『何がこれらの生因 (*jāti*) か』ということで *kiṃjātika* である」とあることから、*jāti* を「原因」と理解していることが窺える<sup>(68)</sup>。

## 3. 「原因」を意味する語との比較

ここまで、「生起」を意味する語の用例を概観した。初期仏典において、*samudaya* や *pabhava* のように「原因」を意味する事例も存在するが、その他の語については「原因」という語義が明確に出ているとは言えず、「生起」を意味する事例が基本的な用法と言える。一方、後代の文献に関しては筆者が気づいた限りの用例を提示したに過ぎないが、「生起」を意味する語が「原因」の役割を担っていることが看取された。そこで、ここでは基本的に「原因」を意味する語の用例を概観し、「生起」を意味しながら「原因」としても使用される *samudaya* と比較する。

初期仏典に頻繁に確認される「原因」を意味する語と言えば *hetu* と *paccaya* である<sup>(69)</sup>。*ni-mitta* や *kāraṇa* のように一般的に「原因」を意味する語も存在するが、用例数という点では明らかに *hetu* と *paccaya* が主なものとして用いられている。そこで、この両語の用例を見ていくことにする。既に挙げた用例も含まれるが、「原因によって生起した (*hetusamuppanna*)」<sup>(70)</sup>、「原因に縁って生成した (*hetuṃ paṭicca sambhūtaṃ*)」<sup>(71)</sup>、「原因から生じた (*hetujāta*) …」<sup>(72)</sup>、「生成する (*sambhoti*) 苦は何であれ、すべては識別作用を縁とすることにより (*viññāṇapaccaya*) [生成する]」<sup>(73)</sup>、「原因を伴い (*sahetu*)、縁を伴い (*sapaccaya*)、人の表象は生起することも、抑止されることもある」<sup>(74)</sup>や、縁起説の定型句である「生まれを縁とすることにより

（jātipaccayā）、老死が〔生じる〕<sup>(75)</sup>などがある。また、「A によって B<sup>(76)</sup>が生じる」という表現だけでなく、四聖諦に関する Thī 158には、hetutaṇhā（原因である渴望）という語が見られる。さらに、仏伝における成道の場面で縁起説を観察した後に唱えるウダーナには、「原因を伴う現象（sahetudhamma）を理解するからである」<sup>(77)</sup>、「諸々の縁（paccaya）の消滅を知ったからである」<sup>(78)</sup>とある。ここに挙げた hetu と paccaya は教理的な文脈で使われているが、両語は仏教教理と関係しない文脈でも使われる。例えば、マッカリ・ゴースーラの説として、「生き物たちには、汚れの原因（hetu）は存在せず、縁（paccaya）は存在しない…生き物たちには、浄化の原因は存在せず、縁は存在しない」<sup>(79)</sup>がある。また、「大徳よ、世尊が尊者ウパヴァーナを退けたことには、いったい全体、いかなる原因（hetu）があり、いかなる縁（paccaya）があるのか」<sup>(80)</sup>、「大徳よ、世尊が微笑みを浮かべることには、いったい全体、いかなる原因（hetu）があり、いかなる縁（paccaya）があるのか。如来たちは、根拠なく（akāraṇena）微笑みを浮かべることはありません」<sup>(81)</sup>という用例の場合、hetu と paccaya は理由を尋ねる際に用いているだけで、縁起説などの教理を意図したものでないことは明らかである。このように hetu と paccaya は一般的な意味でも用いられる。

一方、samudaya は本来「生起」を意味する語であるが、初期仏典の範疇で「原因」という意味でも使われており、明確に分かるものとして既に DN 15の用例を確認した（2.1.）。また、それ以外に「原因」と理解することも可能な用例があり、それは四聖諦や縁起説に関係するものの<sup>(82)</sup>である。このように、教理的な文脈で使われるという点が、教理のみならず一般的な意味でも用いられる hetu や paccaya との差異である。以上のことから、基本的に「原因」を意味しない語が「原因」という語義で用いられる背景の一つには、教理との関連があると推察される。

#### 4. おわりに

本稿では、「生起」を意味する語の用例を概観し、さらに「原因」を表す語についても若干の考察を加えた。その結果をまとめると次のとおりである。

初期仏典において、「原因」を意味する代表的な語は hetu と paccaya であり、その使用範囲は教理的な文脈から一般的な文脈まで多岐にわたる。一方、samudaya に加え、本稿で主に扱った sambhava, samutṭhāna, samuppāda, pabhava, jātika のうち pabhava を除けば、その他の語は基本的に「原因」ではなく「生起」を意味し、因果関係を説く場面で用いられることも多い。samudaya は、仏教教理と関連する文脈で「原因」という語義を担っており、その点が様々な文脈で「原因」を意味する hetu や paccaya との差異である。また、「生起」を意味するこれらの語は、後代の文献で「原因」として用いられる傾向があることも分かった。以上のことから、「原因」関連語を訳す際には、語によって役割が異なるため、それらすべてを「原因」の同義語と見做すのではなく、それぞれの語や文脈に応じて理解していかなければならない。

そこで問題となるのは、なぜ「生起」を意味する語が「原因」という語義を担うのかという点である。samudaya に関しては、先に教理と関連する可能性を指摘したが、現段階で明確な理由を提示することはできない。そのため、以下にいくつか示すように推測するよりほかない。例えば、「生起」と「原因」の区分がそれほど明確ではなかったとも考えられるだろう。あるいは、本稿で確認したように「生起」を意味する語は複合語の後分に位置することが多いため、本来「～から生起する」と理解されていた複合語を「～を原因とする」と解釈した結果、「原因」という意味で用いられるようになったとも考えられる。また、教理が体系化され<sup>(83)</sup>、さらには現象を客観的に分析する思考がすすむにつれて、「原因」という論理的な語としても使用されるようになったと推測することもできる<sup>(84)</sup>。いずれにしても、初期仏典における「生起」の考察という一側面から結論を出すことは難しい。今後、他の様々な要素の考察と合わせて明らかにしていく必要があるだろう。

〔略号表〕

AKBh	<i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AKUp	<i>Abhidharmakośopāyikā nāma Ṭikā</i> , Otani No. 5595; Tohoku No. 4094.
AN	<i>Aṅguttaranikāya</i> , PTS.
CPD	D. Andersen et al., <i>A Critical Pāli Dictionary</i> , Copenhagen, 1924 ff.
Dhp	<i>Dhammapada</i> , PTS.
Dhsk	<i>Fragments des Dharmaskandha: Ein Abhidharma-Text in Sanskrit aus Gilgit</i> , Ed. S. Dietz. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984.
DN	<i>Dīghanikāya</i> , PTS.
DOP	M. Cone, <i>A Dictionary of Pāli</i> , Oxford, 2001 ff.
It	<i>Itivuttaka</i> , PTS.
It-a	<i>Itivuttaka-aṭṭhakathā</i> , PTS.
Ja	<i>Jātaka</i> , PTS.
Kv	<i>Kathāvatthu</i> , PTS.
MĀc	瞿曇僧伽提婆譯『中阿含經』 T01 (No. 26).
MN	<i>Majjhimanikāya</i> , PTS.
Mp	<i>Manorathapūraṇī (Aṅguttaranikāya-aṭṭhakathā)</i> , PTS.
Nidd I	<i>Mahāniddesa</i> , PTS.
Nidd II	<i>Cullaniddesa</i> , PTS.
NidSa(Ch/F)	<i>A New Edition of the First 25 Sūtras of the Nidānasamyukta</i> 梵文雜阿含因緣相應 (第一～二十五經), Eds. J. Chung, T. Fukita. 山喜房佛書林, 2020.
Paṭis	<i>Paṭisambhidāmagga</i> , PTS.
Pj II	<i>Paramatthajotikā (Suttanipāta-aṭṭhakathā)</i> , PTS.
Ps	<i>Papañcasūdanī (Majjhimanikāya-aṭṭhakathā)</i> , PTS.
PTC	F. L. Woodward et al., <i>Pāli Tipitakam Concordance</i> , London, 1952 ff.
PTS	Pali Text Society.
PW	O. Böhtlingk and R. Roth, <i>Sanskrit-Wörterbuch</i> , 7 vols., St Petersburg, 1855-1875.
SĀc	求那跋陀羅譯『雜阿含經』 T02 (No. 99).

SN	<i>Samyuttanikāya</i> , PTS.
Sn	<i>Suttanipāta</i> , PTS.
Spk	<i>Sāratthappakāsinī</i> ( <i>Samyuttanikāya-aṭṭhakathā</i> ), PTS.
Sv	<i>Sumaṅgalavilāsinī</i> ( <i>Dīghanikāya-aṭṭhakathā</i> ), PTS.
SWTF	H. Bechert et al., <i>Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden</i> , Göttingen, 1973 ff.
T	大正新脩大藏經.
Th	<i>Theragāthā</i> , PTS.
Thī	<i>Therīgāthā</i> , PTS.
Thī-a	<i>Therīgāthā-aṭṭhakathā</i> , PTS.
Utt	<i>The Uttarādhyayanasūtra being the first Mūlasūtra of the Svetāmbara Jains</i> (Indian repr.), Ed. J. Charpentier. New Delhi: Ajay Book Service, 1980.
Uv	<i>Udānavarga</i> , Ed. F. Bernhard. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965.
Vin	<i>Vinaya</i> , PTS.
Vism	<i>Visuddhimagga</i> , PTS.
Yam	<i>Yamaka</i> , PTS.
『婆沙論』	玄奘譯『阿毘達磨大毘婆沙論』 T27 (No. 1545).
『法蘊足論』	玄奘譯『阿毘達磨法蘊足論』 T26 (No. 1537).

〔参考文献〕

- Bodhi, Bhikkhu  
[2000] *The Connected Discourses of the Buddha: A Translation of the Samyutta Nikāya*, Boston: Wisdom Publications.
- Gonda, J.  
[1975] “Āyatana,” *Selected Studies*, Vol. II, pp. 178-274.
- Jacobi, Hermann  
[1895] *Jaina Sūtras II* (The Sacred Books of the East, XLV), Oxford: Oxford University Press.
- Masefield, Peter  
[2000] *The Itivuttaka*, Oxford: Pali Text Society.
- Norman, K. R.  
[1992] *The Group of Discourses (Sutta-nipāta): Revised Translation with Introduction and Notes*, Vol. II, Oxford: Pali Text Society.
- Renou, Louis  
[1946] ““Connexion” en védique, “cause” en bouddhique,” In *Dr. C. Kunhan Raja Presentation Volume*, Madras: Adyar Library, pp. 55-60.
- Schayer, Stanislav  
[1925] “Die Struktur der magischen Weltanschauung nach dem Atharva-Veda und den Brāhmaṇa-Texten,” *Zeitschrift für Buddhismus* 6, pp. 259-299.
- Schubring, Walther  
[1935] *Die Lehre der Jainas*, Berlin und Leipzig: Walter de Gruyter.
- 荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄  
[2015] 『スッタニパータ [釈尊のことば] 全現代語訳』 講談社.
- 片山一良  
[2012] 『パーリ仏典〈第3期〉2 相應部 有偈篇 II』 大蔵出版.
- 唐井隆徳

- [2020] 「縁起説の成立史における upadhi と upādāna」『仏教史学研究』62 (2), pp. 1-20.
- [2022a] 「dukkha-samudaya について」『佛教大学仏教学会紀要』27, pp. 105-123.
- [2022b] 「初期仏典における nidāna に関する一考察 ——複合語の用例を中心に——」『印度学仏教学研究』71 (1), pp. 440-435.
- 楠本信道
- [2007] 『『俱舍論』における世親の縁起観』平楽寺書店.
- 中谷英明
- [2014] 「洞窟八詩篇訳注 ——八頌品 (はちじゅぼん) の研究——」『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学論集』佼成出版社, pp. 534-550.
- 中村元
- [2009] 『ブッダのことば』岩波書店.
- 浪花宣明
- [1991a] 「パーリ上座部の縁起の語義釈 —— Visuddhimagga, Paramatthamañjūsā 訳註 ——」『佛教研究』20, pp. 81-106.
- [1991b] 「パーリ上座部の縁起の語義釈研究」『南都佛教』65, pp. 1-18.
- 並川孝儀
- [2020] 「『スッタニパータ』第五章「パーラーヤナ・ヴァッガ」にみる世尊の説示に関する基礎的研究」『仏教学部論集』(佛教大学仏教学部) 104, pp. 1-16.
- [2022] 「初期韻文經典にみる教理化の一断面 ——「無常 (anicca)」、「行 (saṅkhāra)」、「蘊 (khandha)」からみて——」『仏教学部論集』(佛教大学仏教学部) 106, pp. 1-18.
- 原實
- [1983] 「VAJRASŪCĪ 3-4」『仏教と文化：中川善教先生頌徳記念論集』同朋舎出版, pp. 221-241.
- 平川彰
- [1974] 「縁起説の問題点」『佛教研究』4, pp. 1-22.
- [1988] 『法と縁起』平川彰著作集第1巻, 春秋社.
- 藤田宏達
- [1978] 「原始仏教における因果思想」『仏教思想3 因果』平楽寺書店, pp. 83-124.
- 本庄良文
- [2014] 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註編 上・下』大蔵出版.
- 松田慎也
- [1980] 「『第一義宝函』における縁起解釈」『印度学仏教学研究』28 (2), pp. 634-635.
- 水野弘元
- [1968] 「Paṭiccasamuppāda, saṅkhāra の言語的意味」『印度学仏教学研究』16 (2), pp. 936-929.
- 村上真完・及川真介
- [1988] 『仏のことば註 (三) ——パラマッタ・ジョーティカー——』春秋社.
- 山崎守一
- [1983] 「Uttarajjhāyā 研究 IV —— Citra-Sambhūta ——」『文化』46 (3/4), pp. 46-63.
- 山下勤
- [2006] 「インド伝統医学書『チャラカ・サンヒター』における病理論 ——『チャラカ・サンヒター』第二編 第一章 第一～十五節 訳解——」『日本医史学雑誌』52 (3), pp. 395-424.

〔注〕

\* 本稿で使用するパーリ文献のテキストは、PTS 版（Ee）を底本とし、ビルマ版（Be）とタイ版（Se）を適宜参照している。

- (1) 藤田 [1978: pp. 89-94] を参照。
- (2) 詳細については、唐井 [2022a] を参照。
- (3) ブラーフマナの祭式に関する議論に見られる *nidāna* は、同一視されたり密接に繋がっている事象間の〈関連〉や〈つながり〉を表す語と考えられている。これについては、Schayer [1925: p. 276]、Renou [1946: pp. 57-58]、Gonda [1975: p. 222, n. 2, pp. 240-243] を参照。また、ジャイナ教における *nidāna* は「将来への願望」と理解される（Schubring [1935: p. 197] を参照）。「チッタとサンブータの物語」として屢々言及される *Uttarajjhāyā* 13の冒頭の偈には、「確かに、生まれによって打ち負かされたサンブータは、ハッティナプラで *nidāna* をなした」（Utt 13. 1-2 (p. 115)）とあり、この *nidāna* は文脈や註釈の理解から、「〔転輪聖王に生まれ変わりたいという〕決意」と訳されている（Jacobi [1895: p. 57]、山崎 [1983: p. 47] を参照）。また、同章には、*nidāna* に基づいて業が作られていることを示す用例（Utt 13. 8 (p. 116)）や、「ハッティナプラで、大きな威力を持つ王を見てから、欲望の対象の享受に対して貪った〔私〕によって、楽をもたらない *nidāna* がなされた」（Utt 13. 28 (p. 118)）という記述が見られることから、*nidāna* が「将来への願望」を表しているとも考えられる（Utt 13に見られる *nidāna* に対する諸訳については、原 [1983: pp. 239-240, n. 35] を参照）。ジャイナ教聖典における *nidāna* についてはさらなる考察が必要と思われるが、仮に「将来への願望」を意味するとしても、「結びつける」という原意から理解できなくもない。
- (4) Sv (p. 498) によると、*nidāna* は「…その結果を与える (*nideti*) ので、*nidāna* である」と註釈される。*nideti* は「与える」を意味する√*dā* を語根とし、*nidāna* の語源とは異なっている。しかし、DOP (s.v. *nideti*) が梵語の *nidyati* を参照とするように、*nideti* は *nidāna* を意識した語と言えるだろう。
- (5) 中谷 [2014: pp. 539-541] は、「連関関係」「相関関係」という言葉を用いて *Kalahavivādasutta* に見られる関係を説明し、*saññā-nidāna* を「認識作用（の在り方）と相関して」と訳している。つまり、この *nidāna* を「原因」ではなく「相関」と理解している。
- (6) 詳細については、唐井 [2022b] を参照。拙稿では、「世間に対する欲はいったい何との結びつきがあって〔生じる〕のか (*chando nu lokasmiṃ kutonidāno*)」（Sn 866）を挙げ、所有複合語である *kutonidāna* を中心に考察したが、以下に補足しておく。まず、*kutonidāna* に対する従来の訳は次のとおりである。中村 [2009: p. 60, 190]：「いかなる原因から生ずるのであるか」「何にもとづいて起こるのですか」、村上・及川 [1988: p. 725]：「何を因縁としているのですか」、Bodhi [2000: p. 307]：“What is the source of ...”、片山 [2012: p. 331]：「何を因とし」、荒牧・本庄・榎本 [2015: p. 83, 232]：「何が原因か（本庄訳）」「いかなる根拠が根拠になっているのであるか（荒牧訳）」このように、*nidāna* を「原因」と見做し、*kutonidāna* の疑問詞と *nidāna* を同格の関係と理解している訳もあるが、それは以下に示す註釈の前半部分に基づくものと考えられる。

Pj II (p. 303. 10-14)

*kutonidānā ti kiṃnidānā kiṃhetukā. paccattavacanassa to-ādeso veditabbo, samāse c' assa lopābhāvo; atha vā nidānā ti jātā, uppannā ti attho, tasmā kuto nidānā, kuto jātā, kuto uppannā ti vuttaṃ hoti ...*

*kutonidānā* とは、何を因とし、何を原因とするのか〔という意味である〕。〔*kiṃ* という〕主格の語に関して、*to* という代用が知られるべきである。そして、合成語において、これ (*to*) の脱落はない。あるいはまた、*nidānā* とは、「生じた」「生起した」という意味である。それゆえ、*kuto nidānā*、「どこから生じたのか」「どこから生起したのか」と言われたことになる...

ただし、筆者は *kutonidāna* を「何との結びつきがあって〔生じる〕のか」と訳しており、原文

理解という点では、註釈後半の解釈のように *kuto* の接尾辞 *-tas* を活かす必要があると考えている。その主な理由として拙稿で指摘したのは以下の二点である。①パーリ聖典によるかぎり、疑問詞と *nidāna* の複合語は *kutonidāna* だけではなく、*kiṃnidāna* (何を因とするのか) のように副詞の接尾辞 *-tas* が現れない複合語も存在する。疑問詞と名詞の複合語は *-nidāna* 以外にも確認できるが、このように二種類の語形が現れることは極めて稀である。そのため、*kutonidāna* と *kiṃnidāna* は使い分けられていると考えるべきである。また疑問詞だけではなく、関係詞や指示詞を前分とする複合語でも同様の使い分けがあることから区別なく訳すべきではない。②接尾辞 *-tas* を付した副詞を前分とする複合語は何らかの形で *-tas* が活かされているため、前分と後分の語を同格関係で理解できる事例は管見の限り確認できない。

以上の二点は、従来訳に対する問題を提起するには十分と思われるが、筆者自身の訳を積極的に支持するには至っていない。そのため、拙稿でも述べたとおり、この *-tas* の解釈については今後の課題である。そこでパーリ文献を離れてみると、『ラーマーヤナ』には *kutonimitta*、『マハーバーラタ』には *kutomūla* という形容詞 (PW s.v.) が見られ、*kutonidāna* と語形成が類似していることが窺える。PW は、*kutonimitta* について、*kutas* が *nimittāt* の前に置かれているだけなので、非論理的な合成語であると説明する。仮にこれが認められるなら、接尾辞 *-tas* が表れていても疑問詞と後分の語を同格関係と見做すことも可能である。しかし、*kuto nimittāt* という実際の用例が提示されているわけではない。また、パーリ聖典には拙稿で扱った用例以外に、語形成が類似している *tatonimitta* と *yatvādhikaraṇa* が確認されることから *nimitta* と *adhikaraṇa* に対する考察も有益と言え、今後検討する必要がある。前者は *tatonimittam* という副詞で Th 1100に見られる。*yatvādhikaraṇa* は決まったフレーズで用いられ、一例挙げておく。DN 2 (Vol. I, p. 70): *yatvādhikaraṇam enaṃ cakkhundriyam asaṃvutaṃ viharantaṃ abhijjhā-domanassā pāpakā akusalā dhammā anvāssaveyyuṃ tassa saṃvarāya paṭipajjati, rakkhati cakkhundriyam, cakkhundriye saṃvaram āpajjati*.

このように、参考になる用例も確認できるが、そうであっても難解であることに変わりはなく、むしろ *-nidāna* の方が用例の種類と数は豊富である。拙稿では、パーリ聖典における *kuto* を前分とする複合語と *nidāna* の用例調査に加え、*nidāna* の基本的意味に従って *kutonidāna* を理解した。

- (7) SN 12. 28 (Vol. II, p. 44).
- (8) SN 56. 11 (Vol. V, p. 421). Cf. Vin (Vol. I, p. 10).
- (9) DN 15 (Vol. II, p. 57).
- (10) Vin (Vol. I, p. 1), DN 1 (Vol. I, p. 45) など、縁起説に関する用例に見られる。
- (11) DN 34 (Vol. III, p. 291).
- (12) SN 5. 9 (Vol. I, p. 134).
- (13) SN 22. 18 (Vol. III, p. 23).
- (14) MN 38 (Vol. I, p. 257).
- (15) Thī 138.
- (16) AN 7. 66 (Vol. IV, p. 101).
- (17) Sn 620, Dhṣ 396.
- (18) Th 599.
- (19) Norman [1992: p. 291] を参照。
- (20) SWTF s.v. *trṣṇā-duḥkha*.
- (21) 村上・及川 [1988: p. 517] は、『『渴愛が苦の発生するもとである』と、この煩い(過患)を知って…』と訳し、It を翻訳した Masefield [2000: p. 7, 104] は、*taṇham* の異読をとり *sambhava* を “origin” と訳す。因みに、この韻文に対する註釈の中には、「この渴望は、輪廻の苦の *sambhava* であり、発生因 (*pabhava*) であり、根拠 (*kāraṇa*) である」と解釈するもの (It-a (Vol. II, p. 157), Mp (Vol. III, p. 13)) も見られ、*sambhava* を「原因」と見做しているようである。
- (22) It 15 (p. 9), It 105 (p. 109), AN 4. 9 (Vol. II, p. 10), Ja 494 (Vol. IV, p. 354), Nidd I (p.

- 455).
- (23) CPD s.v. ārammaṇa.
- (24) これと同じ語を列挙する用例として、他に Kv (p. 313), Yam (Vol. I, p. 13) がある。
- (25) これらの項目のほとんどは *Niddesa* 以外の資料で扱われている。三不善根と三善根については DN 33 (Vol. III, p. 214), DN 34 (Vol. III, p. 275), AN 3. 69 (Vol. I, pp. 201-205) などがある。「無知を根本とするもの」は SN 20. 1 (Vol. II, pp. 262-263)、「怠慢でないことを根本とするもの」は SN 45. 139-140 (Vol. V, pp. 41-43), SN 46. 31 (Vol. V, p. 91), AN 10. 15 (Vol. V, pp. 21-22) に確認される。また、十二支縁起説は初期仏典中に見られるが、一般的に「無知は諸々の形成作用の根本である」という表現をとることはない。最後の感覚器官と思いとの関係については、他の用例を見出すことができなかった。
- (26) Vism (p. 533).
- (27) Sn 270, SN 10. 3 (Vol. I, p. 207).
- (28) Th 753.
- (29) Th 767.
- (30) Dhp 240.
- (31) Ee: sacittaṃ, Be, Se: yaṃ cittaṃ.
- (32) Ee: pittaṣamutthānāni, Be, Se: pittaṣamutthānāni.
- (33) Ee: sabbantaṃ taṃ, Be: sabbantaṃ taṃ, Se: sabbantaṃ.
- (34) この八つについては、他に AN 4. 87 (Vol. II, p. 87), AN 5. 104 (Vol. III, pp. 131-132), AN 10. 60 (Vol. V, p. 110) に見られる。
- (35) インド医学書である『チャラカ・サンヒター』の第二編には「病因」の類義語として、仏教文献でもよく確認される *nidāna*, *hetu*, *pratyaya* などと共に *samutthāna* も挙げられている。Cf. 山下 [2006: p. 399, 403].
- (36) AN 6. 97 (Vol. III, p. 441), AN 6. 104 (Vol. III, p. 444).
- (37) PTC s.v. paṭiccasamuppanna.
- (38) Dhp 191, Th 1259, Thī 186, 193, 310, 321, It 24 (p. 17).
- (39) AN 8. 54 (Vol. IV, p. 283).
- (40) MN 18 (Vol. I, p. 111).
- (41) PTC s.v. uppajjati.
- (42) DN 16 (Vol. II, p. 104), Ud 6. 1 (p. 63).
- (43) 散文資料だけでなく韻文資料にも四聖諦に関する用例が確認されるが、その中で苦集諦に相当する部分に用いられる「生起」を意味する語は *samudaya*, *sambhava*, *samuppāda* の三種であり、これらは同義と見做されていたと言える（唐井 [2022a: pp. 111-112] を参照）。
- (44) Vism (p. 518).
- (45) 平川 [1988: pp. 322-323] は、*Visuddhimagga* にも後述の『俱舍論』と同様の理解があったことを指摘している。パーリ上座部の縁起の語義解釈については、松田 [1980]、浪花 [1991a] [1991b] を参照。
- (46) Cf. 水野 [1968: p. 933].
- (47) AKBh (p. 136). 因みに、この説明は『婆沙論』(T27. 118b) の「復次因名縁起法。果名縁已生法。如因果。如是能作所作。能成所成。能生所生。能轉所轉。能起所起。能引所引。能續所續。能相所相。能取所取。應知亦爾」を前提にしていると指摘されている（楠本 [2007: pp. 107-108, n. 473] を参照）。
- (48) Sn 862, 866, 871.
- (49) Sn 36.
- (50) DN 18 (Vol. II, p. 217), MN 117 (Vol. III, p. 76).
- (51) SN 15. 8 (Vol. II, p. 184).

- (52) upadhi については、唐井 [2020] で詳述した。
- (53) Cf. Thī-a (p. 268).
- (54) Thī 521.
- (55) SN 7. 2. 8 (Vol. I, p. 181).
- (56) Vin (Vol. I, p. 40).
- (57) PW s.v. prabhava.
- (58) この定型句は、梵文『因縁相応』にも同じ形式で説かれる (NidSa (Ch/F) 9-10 (pp. 119-135) を参照)。以下に示すように、問題となるのは漢訳に見られる表現である。例えば、NidSa (Ch/F) 10. 3aγに見られる(i)d(a)m̐ duḥkhaṃ kiṃnnidān(a)m̐ kiṃsamudaya(m̐) k(i)m̐jātīya(m̐) kiṃpr(abhavaṃ)に相当する漢訳は、「此諸苦何因何集何生何觸」(SĀc 292 (T02. 82c))である。「因」「集」「生」については、それぞれの語に対応していると考えられるが、平川 [1974: p. 5] が指摘するように、「觸」を prabhava の訳語と見做すことは難しい。また、SĀc 291 (T02. 82b) には「此苦何因何集何生何觸。作如是取時當知此苦。億波提因。億波提集。億波提生。億波提轉」とあり、「觸」に対して「轉」で回答している事例もある。さらに、「時思量彼受。何因何集何生何觸。知彼受觸因觸集觸生觸縁」(SĀc 292 (T02. 83a)) のように「縁」を用いる用例も存在する。
- 『因縁相応』以外の資料に目を向ければ、SN 22. 81 (Vol. III, p. 96) には so pana saṅkhāro kiṃnidāno kiṃsamudayo kiṃjātiko kiṃpabhavo とあり、それに対応する漢訳は「彼行何因何集何生何轉」(SĀc 57 (T02. 14a)) である。また、この経は『法蘊足論』や AKUp にも引用されており、梵蔵漢の資料は次のとおりである。Dhsk (p. 53): te punaḥ saṃskārāḥ kinnidānāḥ kiṃsamudayāḥ kiṃjātīyāḥ kiṃprabhavāḥ、『法蘊足論』(T26. 511b): 「此能觀行。以誰爲縁。用誰爲集。是誰種類。從誰而生」、AKUp (Tu 81a, Ju 72a): 'du byed gang gi rgyu can dang / gang las yang dag par byung ba dang / gang las skyes pa dang / gang las rab tu byung zhe na (Cf. 本庄 [2014: p. 211])。さらに、MĀc には「生者何因何縁。爲從何生以何爲本」(MĀc 23 (T01. 451b))、「此四受何因何習。從何而生以何爲本」(MĀc 103 (T01. 591b))、「此四食何因何習。從何而生由何有耶」(MĀc 201 (T01. 767c)) が確認される。
- (59) SN 12. 24 (Vol. II, p. 36).
- (60) 藤田 [1978: p. 93] を参照。
- (61) DOP s.v. jātika, SWTF s.v. jātīya.
- (62) Sn 207.
- (63) Sn 270, SN 10. 3 (Vol. I, p. 207).
- (64) Sn 462.
- (65) Dhp 212. Cf. Dhp 213-216.
- (66) Thī 101.
- (67) MN 70 (Vol. I, p. 480).
- (68) Paṭis (Vol. I, p. 193) には、「いかなる八つのあり方によって無知 (avijjā) が抑止されるのか」という問いに対し、「因 (nidāna) の抑止によって無知が抑止される。出現因 (samudaya) の抑止によって無知が抑止される。jāti の抑止によって無知が抑止される。發生因 (pabhava) の抑止によって無知が抑止される。原因 (hetu) の抑止によって無知が抑止される。縁 (paccaya) の抑止によって無知が抑止される。知の生起によって無知が抑止される。抑止の現れによって無知が抑止される」と説かれている。このうち、下線部には「原因」関連語が列挙されており、その中に jāti も含まれる。文脈上この場合の jāti が誕生を意味するとは考え難く、「原因」あるいは「生起」を意味している可能性がある。特に最初の四つ (nidāna, samudaya, jāti, pabhava) は、語の順序という点で先の縁起説の定型句に見られる語 (nidāna, samudaya, jātika, pabhava) と関連していると言える。また、ここでは無知 (avijjā) の抑止を説く箇所を挙げたが、他の縁起支の抑止についても同じように説かれている。
- (69) DN 16 (Vol. II, pp. 107-109) には、大地震が起こる八つの原因と八つの縁について説明され

るが、八つの項目が挙げられるのみで、*hetu* と *paccaya* の区別がなされていない。そのため、両語は「原因」という意味でほとんど同義として用いられていると言える。したがって、初期仏典の範疇で直接因と間接因という区分をする必要はない（藤田 [1978: P. 90] を参照）。

- (70) AN 6. 97 (Vol. III, p. 441), AN 6. 104 (Vol. III, p. 444).
- (71) SN 5. 9 (Vol. I, p. 134).
- (72) Thī 101.
- (73) Sn 734. Cf. Sn 731, 732, 735, 742, 744, 745, 747, 748, 750, 751.
- (74) DN 9 (Vol. I, pp. 180-181).
- (75) PTC s.v. *jāti*.
- (76) 因みに、B を「結果」と呼ぶ資料はほとんど見られない。初期仏典には因果を表す *hetu-phala* のような複合語は存在せず、それは後代の文献に表れる表現である（藤田 [1978: p. 102, n. 1] を参照）。
- (77) Ud 1. 1 (p. 1), Vin (Vol. I, p. 2).
- (78) Ud 1. 2 (p. 2), Vin (Vol. I, p. 2).
- (79) DN 2 (Vol. I, p. 53).
- (80) DN 16 (Vol. II, p. 139).
- (81) MN 81 (Vol. II, p. 45).
- (82) MN 9 (Vol. I, pp. 46-55), SN 12. 43 (Vol. II, pp. 71-73). Cf. 唐井 [2022a].
- (83) 並川 [2020: pp. 15-16, n. 2] は、最古と言われる Sn の第四章・第五章に教理が説かれていないことの理由として、教理として未発達段階にあっただけではなく、当時の仏教修行者たちにはどうすれば苦を離れることができるのかという宗教的实践に目的があったからであると指摘し、宗教性と思想性を区別しなければならないと述べる。また、教理が構築されるのはそうした時代から一定の期間を経なければならなかった、つまり宗教的实践による覚りの実現よりもその思想的な解明へと変容していったと推定している。Cf. 並川 [2022].
- (84) 水野 [1968: pp. 933-932] は、*Visuddhimagga* が *samuppāda* を「生起させる」という使役の意味で解釈していることから、古くは能動で理解していたものを、後に使役の意味で解釈するようになったと指摘する。そして、部派仏教では諸法を存在論的に考察するようになることから、縁起の概念も具体的存在として考えられるようになり、その結果「諸現象を生起させるもの」という意味で *samuppāda* を理解するようになったと推測する。

（からい たかのり 仏教学部非常勤講師）

2022年11月14日受理